SHIRO FUMI 城踏

姫路市立城郭研究室ニュース「城踏」No.57　2005年６月１日
編集・発行；姫路市立城郭研究室
〒670-0012　姫路市本町68-258　日本城郭研究ｾﾝﾀｰ内
TEL　0792-89-4877　FAX　0792-89-4890
URL　http://www.city.himeji.hyogo.jp/jyokakuken/

えきまえじょうかく

長野電鉄・松代駅

城下に残る矢沢家の長屋門

松代城（まつしろじょう）

川中島で上杉謙信と武田信玄が「一騎打ち」をしたとの話は有名です。本当に信玄が謙信の太刀を軍扇で防いだかどうかはわかりませんが、武田方が北信濃進出の本陣として築いたのが海津城でした。当時の海津城がどのような城郭であったかはわかりませんが、江戸時代に川中島にも大名が配置されると海津城は近世城郭として整備され、ここに紹介する松代城となります。

10年ほど前に訪れたときとは見違えるほどいまでは綺麗になり、城門や土塁などが復元されていて、ここに近世城郭が確かに存在したことを実感できるようになっています。また、城下町であった松代町（長野市）では「エコール・ド・松代」と銘打って観光客誘致を積極的に推し進め、効果を上げているようです。付近にある各施設でも、その趣旨にそって活動しているとのこと。また、江戸末期の建築とはいえ、三の丸跡には新御殿が現存し、藩校であった文武学校も良好な形で残ったことも観光面には幸運でした。現在はこうしたハードを活かしつつソフトに重心をかけていることが感じられます。

また、効果の上がった背景には地元の人たちの努力だけではなく、真田信之が元和８（1622）年に松代に入り、真田氏が城主として明治維新まで続いたという歴史的な事実とも無関係ではないようです。真田氏といえば戦国時代の躍動的な逸話に事欠きません。その話は松代を舞台にして展開されたわけではないけれど、「真田」という大看板が、来訪者に予備知識を与えてくれるのは幸いなことです。一説に、信之が上田から松代へ転封させられたのは、徳川秀忠が真田氏を上田に置いておくことに不安を感じたためとも言われます（秀忠は上田城攻めにてこずり、関ヶ原合戦に遅参して面目を失った）。その説が本当だとしたら長野市は秀忠に感謝しなくてはならないでしょうが、筋の通ったところでは、同年の最上義俊（出羽山形）の改易により松代城主であった酒井忠勝が出羽鶴岡に転封となり、その後を承けて信之が４万石を加増されて上田から移った“栄転”だったといいます（『城下町松代』松代藩文化施設管理事務所1999年）。話としては、秀忠の粘着気質的な一面をにおわせたほうが面白いところではあります。ただ信之の本音としては、「尚々、我等事もはや老後に及び、万事入らざる儀と分別せしめ候へども、上意と申し、子孫の為に候条、御諚に任せ松城へ相移る事に候、様子に於ては心易かるべく候、以上」（「元和八年出浦対馬守宛真田信之書状」『真田氏史料集』上田市立博物館、1983年所収）との記述によく表れていて、この“栄転”を本心では喜べなかったようです。

「新御殿」

さて、松代のあたりは盆地の底のような地形になっていて千曲川が城のすぐ北に接して流れ、それを利用した要害でした（『よみがえる日本の城14』学研、2005年）。しかしそうした地理的条件は「知行所川中嶋は水損の場所にて、年々損毛多ければ、段々御勝手方不如意故、御取続き成り難き由にて、寛保年中の頃、公儀より金一万両拝借仰せつけられ候ほどの御事ゆえ、次第に御勝手御不如意につき」（『日暮硯』岩波書店）というように家中の財政を悪化させ、「取続相成り申さず候」と言わしめる原因にもなりました。水害を避けるために千曲川は18世紀中頃にほぼ現在の流路に付け替えられました。

ところで、松代城はよく軍学のテキストなどで「海津城」として描かれているのを目にします。川を背にし、丸馬出や角馬出、三日月堀、内枡形、外枡形、埋門、太鼓橋など城郭を構成する特徴的なパーツがぎゅっと凝縮された縄張りが甲州流軍学の基本としては好適な素材だったのでしょう。山本勘助が初めて築いたものと伝えられてきたのもわかる気がします。甲州流軍学の典型でも、問題があれば要害であることを多少捨てても縄張りは改修されたのです。

現在、本丸にあった２つの櫓門と枡形が復元されています。写真の北不明門は、当時は河川敷に向いて位置していたことから「開かず」の門だったのでしょう。外門正面や櫓門脇の石垣上には土塀も何もないので、若干物足りなさを感じます。本丸北東隅の石垣は一見櫓台のようですが、櫓は乗っていなかったらしく、少し不思議な構造物です。平面でみると、本丸の広さに比べてやたらと大きいもので、その規模からすれば天守台にしてもおかしくありませんが、北西隅の戌亥櫓台が天守台に相当するとみられています。ただ、戌亥櫓台から瓦は出土していますが、礎石は未検出なので（『よみがえる日本の城14』）、それほど大きな重量をもつ建物ではなかったと予想されます。

もう一つ不思議なのは、本丸の石垣は全体的に立派なものにもかかわらず、その上に多聞櫓が一つも乗らなかった時期があることです。100m四方の限られた敷地に御殿を造る場合、敷地を有効に使うためには多聞櫓を巡らすのが常套でしょうし、本丸全体の防御性向上という観点からも不可欠だったはずです。実際には多聞櫓の存在した時期があったのかもしれませんが、江戸時代を通じて本丸にそういう櫓がもし存在しなかったとすれば、松代城を城郭史のなかでどう評価すればいいものなのか考えさせられます。

石垣では、修復された部分とオリジナルな部分の境目に鉛板が挟まれている（○印）。

北不明門（西から）

松代城全体図（案内板より）

堀跡（東側の外堀）の復元（白い砂利で表示）